訓幼字義

三

心
性
情

13
937
3

慶應義塾図書館

訓幼字義　巻之五

心　凡三十三則

心とは人の思慮運用するところをいふ。別義多し。経書に所謂心とは皆此意なり。後世人心体用をいふ。一念未發の形をいふ。思慮運用するところをいふ。宋朝以来の說なり。聖人の意よりあらず。聖賢の所謂心は皆已發不能已者をいふ。詩書六経皆然り。已發を未發のことのごとくいふ。体用而已言者。自註感而遂通天下故也。又云喜怒哀樂未發謂之中。寂然不動者也。發而皆中節謂之和。感而遂通者

やはり二章ゝゝ小近思録よりのことあり。先儒人心体用の説あり。
中庸系辞よりゝゝ此説多出ゝゝ未発の中のゝゝ中庸
発揮小論とゝ書。本樂の法と称したる物ゝゝ人のゝゝ
あゝ法ゝ中の條下小論とゝ書あり。寂然不動のゝゝ
易之系辞より出し。易無思也無為也。寂然不動感而遂通ゝゝ
ゝ故非天下之至神孰能與於此ゝゝ此語ゝゝ蓍策
の無人ゝゝゝゝとゝ人ゝゝゝゝ人のゝゝふあつゝ法本義云易指
蓍卦ゝゝ人ゝゝ妙其動静亦如此ゝ本義ゝを此語ゝ蓍の
ゝゝと説ゝゝゝゝ註あり。程子仮象ゝゝゝゝ人のゝゝふ用ひゝゝ
ゝゝゝゝ本義に人ゝゝ妙亦如此ゝ融通ゝゝ註あり。然ゝゝゝ
本文ゝゝ蓍策のゝゝあり。人の本人未発の後接ゝゝひ

あゝゝ
右の経書にゝと説ゝゝ甚ゝゝあり。詩経より中人義ゝゝ云書
経より大王ゝゝゝゝゝゝゝ何ゝを法ゝのゝゝふゝゝ。文王
ゝゝゝゝあゝ法論語ゝゝと説ゝゝゝふゝあり。七十後ゝ
所欲不踰矩ゝゝ三月不違仁ゝゝゝゝの法あつゝゝ
ゝゝゝゝ修簡在帝心。無所用心有心哉聖者の類ハ何
ゝゝひろくゝと説ゝゝゝゝ善悪の法より物ゝゝゝゝ人
の聖人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ大器ゝ
ゝゝゝゝ
右の書ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ未
発ゝゝゝゝゝゝゝゝ。書経の洪範ゝゝ事ゝゝゝ。彝言視聽思

しつべき事をいふなり。人のみまと拳くに思ふべし。
人の思とさしつべき。孟子に。官則思。思則得。不思則不得や
とあるの義に思をとると訓ずべし。又大学
の正心の章に。忿懥恐懼好楽憂患と訓ずべきことあるを。
古来皆已殺以後のことゝ。そもそも未殺とは殺の後の
いまだ殺と出ざるを。石火のいまだ出ざるをあらはすこゝろにて。心
に寂然不動のこゝろ。一念を起さゞるこゝろにて。ものゝ思なり
日本紀に。已殺のことゝ。ものゝ思なり。いかや忿懥恐懼等の後徳と
ふことをつゝ。未殺とつゝ。ものゝ思なり。徳ふ古人の書に。何をか思
とかの義なり。忿懥恐懼等のことを訓ずべし。正心の條目にもとるはい。
古人のこゝを說。そもそも已殺の上にあつて未殺の說なりてこゝ

なり。
聖人のこゝを拳めて己を拳むるは。仏法仁義を訓ずべき目あ
てにて。人心を清浄にするにあり。浅世の学者一人を清浄に
して。物欲を掃ふを専務とす。仏法に仁義礼智とかふ
異名の程にあるはあやまりなり。仏法にこゝろのはたらきを拳
ぶとは。又あれこれを拳ぶとは。好悪にあるべきなり。
あひまさりあれこれ多きものなり。そもそも人聖人の
とへば仁義礼智を訓ずべきは。人の乃
古来ふるくより。諸説あるところにて知ぶと考べし。
何をか思ふべきの浅世の說のごとく。虚妄不殊なる
物あるべきの内ふかく分べき。自のうふかひをあれこゝに

あるまゝにすなわち常人尚絶学とは
くしくに一毫のごとき汚あるべし絶ふ夫子七十の歳よい
たらくに矩を従ん所欲不踰能とのゐはいかでやきろ
の汚ふきろくれいかゝとのうにたらくに多さゆへ学ばしは
ゝるひくに七十の境界よいたらくんにとて我よりくんの汚く
ふゆゝたるひくもどのつゝのうにたくゝるれとるべ顔子者
三月不違仁もはゝくゝるべ所謂人欲をもむるの物ふくんを程と
異ところふあゝくゝ者ゝ推ゝ知ゝ
後世傷家の說を切とくんの嗜欲好惡振ゝるハ皆人ん
のたゝくにくゝ中んあゝ汝中んとものハ月の天上あるゝ
ゝ清淨虛明ゝて一点のくゝるもゝ人欲者をもとを

ふゝるくゝのうにたくゝ多ゝ山若晁無咎に賜る詩ゝ中ん
如日月行欲食ゝ既ゝ乞朱子明明德の解乃意ゝ明鏡
水の說者をゝるくゝ中ゝ後をゝゝ上限ゝ所拳夫子のゝ
ゝふゝと者ゝ中ハ左ゝあゝ汝又孟子岩子の篇ふ孔子の說を引く
いゝ採則存舍則亡お人無時莫知其鄉惟心ゝ謂ゝ古ゝ人ん
のゝのゝゝゝくゝをしいゝるゝあゝ中ゝ者ゝ中ゝとの
ゝ夏ゝ夫真金ハ大ゝ人でやゝゝ者ゝ中ゝ性ゝ者ゝ
ゝるゝんゝふゝの後世の說のゝくゝ貴ゝ真金の不壞ゝるゝくゝ
りのゝハあゝ者ゝ中ゝあるゝ者ゝ中ゝ汝をゝくゝあゝ
くゝるゝくゝゝたのゝゝ者ゝ中ゝ者ゝ中ゝ者ゝ中ゝ
ゝ謂ゝ古ゝのゝ者ゝ中ゝ者ゝ中ゝ者ゝ中ゝ人の不謂ゝゝゝ者ゝふ和

学えの上ふくのるひく。虚妄不眞の本体とさとふあらさるを
てくをうもく〜
後世ん学さうんるふうんの本体よお入存亡〜〜〜いあるを
しれとう能あう。宋の時花徂禹字清夫〜〜人あう。程子に
〜〜学ひ。唐猶とあう〜〜れるれ人ありて女子七歳の時
ふ孟子の仕章とうくく。ふよいお入るれるのあう。孟子いんとも
次〜〜。侯門先生古学とれくく。仕女孟子とも〜次〜〜〜を。
おへうくんとも〜〜〜。或人仕〜〜と挙く朱子に問く。ふれい
侯門のゆうくうて〜〜〜。朱子の色言よいう。此女
必天資る見此ん常湛然安定無お入。然元人不能皆如此。
若し通京人論くん却えを作底物。孟子所門弟子〜言〜〜〜

人論耳。又陽明の書よを。ん入お入る〜。出入ハ仲用の謂ありくい
へう。諸先生の說と通〜見るふ。畢竟ものの本体ゆを出
入ふ〜〜〜る拾ものう。大抵宋の一代ハ前代よりも後学さうんより
行るふうく。文武百官皆後学をとせうう人ふ〜。幼少の
女子ゆくを膝悟ある生付のものハ皆その訣とん得くゆく
孟子とうこ出へう。後世の說ありて人ハ孟子ふのもうて学ふハも
て〜人ん上ふ拾くいひく。後〜ふあ〜れ〜ふう。然もこを
りうう孟子の語ふをあくふ。孔子の語ふをハうこゆへて〜さうり
あ〜次。それうく。古聖人の所謂ん〜〜〜ふの。皆已数の上ん
んよ拾く說とふく。虚妄不眞の本体とさとふあうさうこ
〜ものう。

孟子の以前人の善悪の說あり。論語の教語を考へ
何をか人の上の物ごとく定まるべき。善と定まるべ
ふべからざる。先づ善良說、本性說四端の心說、人
と善あるものとの心出る性善良知良能の說とは
あく自暴自棄のものたるべきを行ふのみ已に具
ることを示したる人性昂仁義良知本性昂仁あるべし。
漢唐の諸儒孟子性善の說を服せざるべからず。良知
本性の說世を倡ふ人多し。宋朱子程子代ふ孟子
と崇信せざるべし。性善の說聖門の功あるべし。独
そのべき性の說さんあるべし。孟子の所謂人いとものと
しかるべきゆへ孟子とべいべき孟子の意

とべきゆへ
孟子の所謂人とものべきゆへ已後の上の物ごとくべし。前の
詳の論とべきゆへ上べき知覚のべきとべきあるべ
ものべきと善人の物ごとを論と。故の云雖存乎人者豈無仁
義べき。又曰人皆有不忍人之心。側隱べき仁の端や云
と。又良能と云本性と云何をか物をべきべ物とべ人の物
をひべきの義礼と希べきとべきべ仁義の
いべきべ人のべ。虛妄知覚の本体の仁義の理をべ
て。べ出べべとべきべ先べ立べ人べ孟子
べ本性べべ後世諸儒べ本性べべ孟子
べ次べ考べ人べ後

孟子に求放心といふことあり。此心ハ仁義の良心といふ事なりしかるに
後世にいたりてハ此心の義礼をわすれて放心といへハおや
ほうけたるやうなる人を不動静のことをさして昏昧放逸といひて昏昧といふ。
静なるハその放心なるこころの散りてさだまらぬをいふ。紛
云放逸といふハ動時の放心なり。心のちりて他事におもむくを
といふ。かくのごとく昏昧放逸なる心を禁ずるを此間にいれて求放心
といふ。何れも孟子の意にかなはず。前章において所以放其良
心者。亦猶斧斤之於木也と又此章の前節に仁人心也といふ
とあるを。下に有放其心而不知求といへり。此心ハすべて放心といふは仁
義の良心をさしていふなり。ただ昏昧放逸のこころとさすにはあら
ざること志るべし。秦皇の儒士を坑にし白起が降卒をとらへ

まさしくこれをさすなり。放心のうたがひなく此心をさすなり。しかして
下。不仁不義のこととして。何ともおぼえざると放心といへるなれハ
去りしそれをひきかへしてこれをかへさるるを放心を求
といふ。本文をよく玩索して見るべし
孟子に曰。学問之道無他求其放心而已矣といへるも。此心を無他といふ
而已矣といへハ此外又別義なきなり。しるべし。然るに集註に学
問の道固非一端とあり。此心ハ求放心のことを必得し観法のごとく
にするになりてハ。此心をかへりみ書をよみ理をきはむる許多の
工夫なきやうに。後学にありていふところもあるべし。固非一端といへるも
孩提も孟子の一書ハ仁義の二字よりの紬繹し来りたるもの
なれバ。一の仁義の旨にあらざるハなし。然るに此心ハ仁義の良心といふなひ

ゝと求るゝ事なくゝ書を讀る理を議求るゝ
もの〻つゝゝを中に出るゝゝ多し他〻〻云而已矣ゝゝ
右なあるゝ多ゝ上陸象山の學をゝ事んゝとをゝて
讀書窮理ゝとせんゝせゝをす集註又固非一端ゝあるを
又出ふあるゝのゝゝ多し
先傷求放心のゝゝと出る上文註ふゝ強ゝ
ゝ求ゝ得見んゝ多ゝゝの遠急あり朱子の曰人心後覺附
便在孟子說求放心求字早ゝ遲ゝ又曰只曰知ゝ放而求
ゝ斯不放矣而求ゝ三字亦自剩ゝゝ放心ゝ
ゝ出ゝゝ昂ゝ求放心別ゝ出ふ
而ゝゝ出ゝゝ

ゝ強ゝゝとゝゝ出ゝゝ多し若海垂面視ゝ岸ゝゝ
諸類此求ゝ得ゝ捨ゝ多し先傷のゝ意出ゝゝ
多〻〻ゝ明ゝ見性の說ゝ出ゝ孟子の意ゝ天測のちひあ
ゝ出ゝゝ得ゝゝ學ゝ強ゝゝ固非一端ゝ
ゝゝ多ゝゝ孟子の意ゝ仁義の良心ゝ
ゝ出ゝゝ強ゝゝ孟子の意ゝ
ゝ出ゝゝ禪說ふ強ゝの類多〻
書經畢命の篇ゝ雖收放心閑ゝ惟艱ゝ
ゝゝ後世の放心ゝ
の內ゝ南ゝ初ゝ出ゝ後世の偽作ゝ先
傷ゝ出ゝ強ひゝ強ゝ出ゝ
大學ゝ正心ゝ章ゝ俄在正心者

所忿懥則不得其正有所恐懼則不得其正有所好樂則不得其正有所憂患則不得其正とハ。章句に云。蓋是四者皆心之用而人所不能無者。然一有之而不能察則欲動情勝而其用之所行或不能不失其正矣。此章ハ忿懥恐懼等のたぐひハ人ごゝろのなくてかなハざるものなれども。執滞してとゞまる時ハあしゝ。怒るべくしていかり。喜べくしてよろこび。其ことさりぬれハ。もとのごときよく平にしてとゞまる事なくして化せざることなかれ。ゆへにしるくよろし。たとへハ鏡の中に一物をたくはへざれハよく万物の影をうつし。秤の上に一物を載ざれハよく万物の軽重をはかるごとし。しかるにこれら四つの物心に執着しぬれハ不化。これハたとへハ鏡の中に一物を有在するときハおもりたるがごとく。

あしき秤の上に一物を置くときハ物の軽重をはかることなし。是を心不正と云。朱子のいはく。好樂之類。是合有底。只是不可留滞而不消化。又曰。心不可有一物。喜怒哀樂固欲得其正。然過後須平了。又曰。未有當怒當憂者。但過了則休。不可常留在心。これなり。語類に是を見と三つにわかつ。一つにハ偏重と云。二つにハ留在と云。三つにハ期待と云。偏重と云ハ。かの一事に滞りて他事にまどへるの附ぞくを云。たとへハ一人と対話して心をそれにとられハ。他の人れ物いひてきけとも耳にいらざる。これ類なり。留在と云ハ事すでにすぎされどもなほ心にありてのこる類なり。期待と云ハ事のいまだいたらざるにさきだちて待まうくるなり。此三つのものをもて心不在と云。正心と云ハ此三つのものゝやまひなきをいふなり。程子の

定性書ハ無將迎無内外ニシテ物ニ
応テ留住ナシ。迎ヘテ内ニ入レ
ヲ人ノ物ハ拒ミテ受ケザルガ如ク
應無所住而生其心ノ旨ニ
ラト

先人大学定本ニアリテ曰ク忿懥恐懼好楽憂患
若以大学律之則皆雖人不免放心豈可平哉又論孟
字義ハ物ヲ以テ仁義ト為ルト為ルトセ
ヲ以テ忿懥等ノ四ツノモノヲ以テ孔孟ノ血脉
ヲ以テ故アリ。正心ノ字ハ孟子ニ
ヲ以テ民ノ人ヲ以テ己ノ上ヲ以テ人

ヲ以テ畢竟仁義ノ良ヲ見テ剛毅ニ強ク
ノ見ヲ類ヲ以テ。拘ル事者或ハ絃ヒ
ヲ害ヲ以テ。人ノ意ト并セ
字本字義ハ義ハ小ヲ以テ詳ト
或人ノ忿懥等ハ正心ノ用ト挙ク。忿懥恐懼好楽憂患ヲ
所ノ心ハ人ノ本ヲ以テ戒ル事アリ。次ニ四ツノ
ノ人ノ本ヲ以テ戒ル事アリ。次ニ
ヲ人ノ本ヲ以テ戒ル事アリ。次ニ
ヲハ帰ル。若シ如ク
ヲ人ノ本ヲ以テ戒ル事アリ。有ノ字ハ氣ト対シ
ヲ人ノ本ヲ以テ戒ル事アリ。その一念ハ

ゆへなくしてまどふことなり。然るに字義に忿懥恐懼とあることなきさ
すれはよくいへる語なりと雖とも本文の意にあらす。須曰。有所二
字のことくに諸觀すとあるへし。曰。四者只要從無所發出。不可先有在
心下。須着有所二字。又曰。有所是被他為主於内。心反為他動也。
葛寅亮湖南講云。所有所者。從所之氣質用事而著於方寸
之損也。黄太釋宜照解云。正以心之本体空洞。安得有許
許者。不從心之虚具起念而從所之嗜欲動情也。又四書眼といふ
て云。有許者。偏也。偏起于蔽。偏蔽者。如何明明徳于天下といふも
なる皆本文と遷就したるものなり。有所と取りて。文字の中に
多くあり。必すしもこれとしてあるにあらす。近くさしていふには論語に
有所不答者。有所試矣。孟子に。人皆有所不忍。達之於其所

忍仁也。人皆有所不為。達之於其所為義也といへり。又將大有
為之君必有所不召之臣といへり。有所不忍有所不為といふは只
其場にあたりてさして其のことをせぬといふことのやうなることなり。
必志のひさることあるに着し。せさる事にしていふにあり
也。然れは忿懥する事あるによりて執著有在するといふことをとり
あつかへらるへし。然れは本文の意は。忿懥恐懼等の念の
為に本心を動かされさるやうにとさとしたるなり
或人の云。大學に心不在焉視而不見聴而不聞食而不知其
味とあるは放心のことし。孔子の忘食肉の味を不知しのことは誠
のことし。是別のことなり。一概に論するは次第をとらへ。大學と雖
もとへるにはあらし。常をやむることを得さるの説なり。正心の説によるへく

いふときハ事の善悪といふにあらず。たゞ吾心の着せざるやうにするなり
しかるに孔子ハ夫子の韶を聞て三月の後まで肉の味をしらず
さあれハ留在してしまふものにあらずや。周公の坐以待旦、孟子の表而
不寐ハ期待にあらずや。顔子の死をいたく慟せるを見るに
かゝるハ偏着にあらずや。かゝれば聖人のうへにも
かゝる事の善不善を問ず、心の着せざるやうにすべしといふて
更用もなくしてあるべからず
人心の物に感ずるハ善悪ともにしらずして感ずるとき
これをさへなくさんとするハ、或ハ寂に見、或ハ死物の如くなりて忘却を
本とするのなり。しかれども一概に非とハすべからず
心の動ぜずして偏着せぬに次ぐ善にあらずといふべし。しかれども人の

さるのみならず、只守りて不保、偏なりて吾心の正しくならざるやうにと也。
何ぞあれハ心の物に感ずる。是非邪正にしたがひ、当然の人心の当りむく
とし。声色臭味の上にあり。ゆへにまた感ずるも又声色臭味の上に
在て害し、一旦楚の襄王の夢に迷て神女を受けし、殷の紂の官爵をむさぼ
りて空盈を建てたるは、その心に嗜まざる所に戒むべくして論ずる
にあらず。又聖人の善とするのハ常人の声色臭味とむさぼるのこ
とし。ゆへに善なるを見て善人に遇ふときハ心にとゞまり給ふ。此に反して爰に
見他なると忘れ給ふて、孔子の周公を夢見て韶を聞て肉の味を
忘れたまふとし是もあり。舜の上聖の徳を以て玄治の時にあるも。
故に其楽善深くして他の楽のまとはざる所あるも。
衆人をも上に聞くハ、偏に不似なるにはあらじ。彼の他をも好む

人のあたゝかなる血肉なり。仁は物を育する事なり。
文字は篆とかゝれたるなり。酒醴は作酒なり。三月の後
始て肉の味を知るなり。孔子の孔子なるゝ所なり。
交肉と食はれたる人倫なり。此一段は語と同の会いまく化せして
味を知らざるべからず不在乎しかるあるべしや。孝と今日学者の
上よりうくるを知らざるは怠惰無頼なり。学問とは
のまなるものにて生徒の性の中なる遠きものなり。
しるしを知るべからず書と読しかるを胸中にあり
なり。や議論なるものへばなるべく書とうゝ義理とせん
れとしるべきなり。ちなみに講習討論をなすべし。孝又後ゝ
学とのむしらるべきなり学問とはなるものにて

よるものとなるべしゝとおもふ。おのゝを弱きものゝやまとを表示
見使のものとなるべしゝなり。正しの説と仮なるべしゝなり。
とを放んとしひくゝうめんや。梁の顧欽の崔の賤と作るべく
崔小未と呼まるる風の書とゝゝく表とゝゝなるべし。
後ゝ小記論問章のゝなるべし。学問とふんとなるべく他
なるとなるゝ奇特なるゝかなるべし。孝と正史なるゝて。
の義論と仮。又邵康節の易とぬく表不孫とあるべし。
ゝなり。故に聖人の人とゝなるべし常に徳とおのむ学とおのむ
なるゝ称美ゝ称ひゝ。なるべしの学なるゝといはゝ。
なゝ。周公孔子のゝとなるゝと。第世学者にやのゝあり
くるを志ゝ。善とこのむやうにせゝのなるべし。後なるべし

物のまだ形なんの物は着とるといふ所へ物を人のそなへり
あるべし。常座の人はあるべきに人に欲んとしてこの如く空を人の
上にあるべき至誠の感ずべきなり。空しくあるべ
先傷又類子の不遷怒とは正人の能技とせり。程子曰。顔子
の怒。在物不在己故不遷。又曰。去怒在幸則理の當去怒者也不
在血氣則不遷。若羅之誅四凶也可怒在彼己何与焉。如鑑之照
物妍媸在彼隨物應之而已何遷之有。朱子曰。幸有當怒當憂
者。但過了則休。不可常留在心。顔子未嘗不怒。但不遷耳。諸
類正人の修下にあり。先傷の該乃至去怒哀樂ことを。
留在ことをいふ。ことをいふ。彼人の顔子のと称
しことを。何ゆへは不遷去怒ことを言ことをしてたく不遷怒ことを

ことをいふの為なり。去怒ことを人の用をもことを内ことをは道
徳をことをなることをしてたいことをとことをことをあるべし去怒とことを
ことをの為をしてたいことをとことをことをのことをあるべきもの
去ことをことをことをことをことをことをことをことをことをことをことを
人と招ことを酒とことを人をことをことをことを招ことをの客ことをことを招ことを酒
ことをことをことをことをことをことを人のことを罪あることをことを人
ふことをことをことを者をことを撃せんは理なり。不遷怒もこの類
なることを。空人の為をもと本ことをたることをことをことを称
後世人と清明ふることをことをことをことをことをことをことをことを去怒ことをふう
ことをといふ。先ことを次ことを別ことを糸ことを考ことを
羅ことを誅四凶怒在四凶羅何異ことをいてことをあることをことをこの

しかれどもこれをうけ。ちからをふるはず。ただ人のそしりをうけ。
ただ怒りをのぞくのみ。ふるまひをつくしうるかぎりの人のそしりをうけ
あらぬ。ただ哀樂の上をもつてをのれをのぞく。父母親戚の喪
にうるこのこころをもつてこれをうるのみ。むかしうんぬんとなり。切
ふかくこれをうるのみ。悲哀愁傷してこれをうるのみ。これをうけ
ざるのこころ。堯舜亦人耳。堂人ここをもつてよろこぶ。
若嘉のんあつさゆへ。哀喪のんかつてこの人をあつ
かつ人。先傷堂人のんと清淳庶明よしてこんをうけ
たまふゆへ。舜のいろいろ在彼不在己。たまあるまれ
つ。内常人の怒しこの人の怒しかりつくあること
のこの問。かつ況。ただを上る論をうるまつ。堂庶の人ハ。

何のいとまあるべき。家人ようやくこれをいう。ちからをふるはず。堂人
をそそぎまつるのみ。仁義をうるのみ。人の善をうけうるこ。
人の不善をうけうる。四海をのゆ悪逆無道ふかく。天下の
害をうる。ただ人をそこなつく。仁政をうるこうる甚し。
徳をふかくうる。舜のまことをうるこうる。堂の人をうるこ
しくこころをふまことを放流しこころをゆること。大学曰。唯
仁人放流し逆諸四夷。荀子曰。仁者愛人故悪之所以害之者
しそなつ。武王の怒をいつくしこ。人の撫育しこ天下
害をうるこうるこ。堂人をいつくしこ。ただ誅伐しこ。故孟子曰。
と大勇しこ。堂人のいろいろとこ。ただ不ふせこ。
の諸侯をこ。堂人をこ。諸侯をこ。放流しこ。怒のんゆへ。

までもし志あるべき所あり然怒はさもなきにあるべき所にあれば
は尚以て説べからず
仁義の名は人の標準なり。故に生付のよき人なれども、その志を持
うるやうにしてもあらば志をもちて志をひとつにし独りの志によりて肉の味をも知
をも去る不條としいへり。何を此志とせん。故に聖賢の書にはこの
やうなることをたつることを第一とす。後世の人は志とかくの
ことにあまりて志あるべき事なり。後世にては法をさまにせられ
もがくのことをして、人々のやまひとなり。故に聖賢の書に此
やうなることを多く述べたり。先儒の會通には聖人は各別のこととて常
の人にはあるべからず。凡人のやまひとなり。まことのかなしきにあらず。気
皆老佛虚無空寂の教へにより、静なるに似て聖人の名ごとし水

氷炭のちがひあり。佛氏は仁義礼楽をなくしほろぼして是は
ら自己一心を清浄にすることをのみむねとして悪念のおこる所
善なる事は少にて善念までもなく、ただ清浄にならんとせしかば是
をも去るべし。白楽天云、垢即不浄、念亦可払
とあり。惟寛禅師に問ひて云、如人眼睛上一物不可住。金屑雖珍宝
在眼亦為病とこそ、この外かくのごとき説多し。儒家にも是を曰
ふ禅家の説あり。何も善をもとらざるといふなり。善悪をわけ
まとめに一物とし、念へを洗ふなり。先儒の説にもまたはあまと
も畢竟此説にかなふ。須知ものなし
先儒も是を論せられたるに、常は虚霊不昧といひ明鏡止水のごとし
といひし此は大学定本論孟字義にあげて論じたるにてらしみるべく。

を皆佛者の說なり故に望人の書ふかきなり此語のおこりこの
なる理をあらはすべしこれ前のおもてのこの條下ふかく辨ずる論なり
しかるをいまこれを用ゆるに人人ひとしく糸ほうふかきなり。
虛妄不昧　しかるにいまこれを大字章句に明鏡止水の
しるしの程なるの說なるべし望人の如明鏡如止水とは
類多くあり。出世なり法なるの子者又は賢のこれはかりなり
なりなるのこれなり。虛妄不昧の四字は佛書なり又は靈々
不昧なる々常知なるこの類多く禪佛の書なるなり明鏡止水
のこれは莊子なる連用してみえたる鏡なるこれ止水なるふ
なるこれ。那ふかえなり。神秀の偈なるに菩提樹は如明鏡
臺時々勤拂拭莫遣塵埃。佛書なるこれ鏡なるなり

あるこれなり。眞なるあるふかきなるあるこれ何をもこれ佛氏のこれ
淨無欲なるこれ故なるこれ。なるこれ
なるこれの意なるひなるふかきなるこれ。
一。望人のこれ人倫用と重なるこれ
なるこれなる人皆有不忍人之心。先王有不忍人之政
なる。側隱之心仁之端なるこれ。義之心之正
なるこれ。流水なるこれ前藥なるこれ
なるこれ。次第なる生長なるこれ心なるこれ
不昧なるこれの正体なるこれ。虛妄
なるこれ。何なるこれ
なるこれなるこれ物なるこれ生物なるこれ
なるこれ。明鏡止水なる物なるこれ

あるべきなり。無情なるものは佛氏のいふ
たるものなり。聖人仁をもつて天地を視
義重を同じうす。ゆゑに仁義ともに親(ラル)ばれ
又人心道心ともに書經の大禹謨の篇より出
る。舜禹授受のことばなり。人心惟危道心惟微惟精
惟一允執厥中(ヲ)とあり。先儒傷眞西山曰十六字は堯舜
聖學の根本淵源なり。中庸章句の序に詳
しかるに人心道心の名とこの二句と義理とあり
希夷の人の屋裏知有人の句あれども人心の形氣なり
いまの惟危惟微の義理なり。
故に人心道心よりこれを覺ることかくのごとし。
義理なり。

かくのごとくこれをひやとこれをのあり。故に人心惟危道心惟微とこれ
ありとこれをもつてこれをしるべし。人欲をもつてこれを
ならしめ人のこころをもつてこれを
やうにこれをこころと字をとくこと
ならしめこれをこころと字をとくこと
ならしめこれをこころと字をとくこと
ふもとも不及の義なり。故曰惟精惟一允執厥中(ヲ)とあり。堯の舜
にこれをもつていたる。允執厥中(ヲ)とは一なり。禹の授舜
にもこれをもつていたる。允執厥中(ヲ)とは一なり。禹の授舜
とのことばは書經の大禹謨の篇なり。書經の纂傳
考べし。朱子の言行錄に
堯の舜に授るは允執厥中(ヲ)とのみ。書經は八字なり。

論語堯曰の篇にすこしばかりあるを傳へしに宗信とかきてあり。
論語には堯より舜に命じ舜亦以命禹とばかりありて別の子細なし。
今の書経にのせたる所は三言よりなりて彼一言を引いて
それほどの大切なることなし。論語にいとはるかとおなじのたるは
下なり成湯武王のこととさまざまおほく中には民食喪祭など
のこれは危微精一の十六字にたくらべてはいかにもはなれてなれど、さし
あたることのなく三言のことゝおなじくはなし。経書は古への書経
にはただ三言なさてしるべし。後世の附会に出たるしるしなり
書経は今文古文の差別あり。今文といふは秦の時の博士の伏
勝といふもののおぼえて書経を全く記憶せられ漢の世に至りて
景帝の時に大常掌故晁錯といふ人におしへて傳授

せしむ二十九篇あり。これら當代の文字なるゆへに今文といふ
なり。今文尚書といふ。今の堯典益稷などの篇是なり。その
後武帝の時に魯共王といふ親王ありて宮室を作らんとて
の孔子の舊宅をこぼちけるに壁の中より古の竹簡に書
たる書経あり。是は秦の始皇の詩書を焼れけるとき孔子
の子孫古書のうしなはれんことをなげきて壁にかくしおかれたるなり。その
ときの古文字科斗の文字なれば読む人なし。其書を古文尚書と
いふ。これを献上しを武帝の子戻太子の事に付て禍ありて世上
擾乱して学問の沙汰もなければ古文尚書ともれありしを
なし。晋の世になりてその書をうしなひて後四百年
を経て南北朝のはじめ古文尚書といふもの稍世に行はれて唐

のこれに註疏を作り。古文今文を合せて五十八篇あり。今の蔡
傳も是なり。そのうち孔安国より出る古文は後に上代の
真書なるべし。然れども漢の時に秘して傳はらず。後に至り
古文といへるは孔安国の書に名をかりたるもの也。真書にあらず。
大禹謨五子之歌等の篇是なり。先儒朱子呉臨川明の国子
学正梅鷟帰震川郝京山の説には何れも古文の疑ありとて
しりぞけたり。大禹謨の一篇も古文尚書の内なれば危微精一の
十六字舜禹授受の辞もいつはりなり。漢武より後四
五百年の間。後漢の鄭玄礼記の註。三国韋昭が国語の解。晋の
杜預左傳の註にも古文書にいへる辞と引ける書は何れも逸
書と註して篇をあらはさず。その上漢魏より晋の時には古文

尚書といふものの世間に行はれず見えたり。是後年数をへての
ちなりて世に出たり。縁によりて作る篇なし
大禹謨の一篇に就ていはゞ疑べきこと多し。三苗征伐の
ことの書きは堯典益稷及び呂刑に載る所と見えず。何
れも舜摂政のときに事を載て堯の代のことなり。然るに
大禹謨には舜の世となりて又禹の征伐ありと見えたり。此
の篇に載ることは符合せず先儒議論あることなり。
何れもあやしむべし。又三苗をさして曰。君子在野小人在
位と書きたる疑べし。君子在野小人在位といふは夏の桀殷
の紂がことをいふなり。三苗の国は人面獣身の
国なり。君子小人のわかちをなすべからんや。舜の世に在てさるを

分北しくことを絶ことく小学ふへしとあるあるへせむつとの元長をあるまじれてあるう。又瞽亦允若至誠感神矧茲有苗しいふしあるうちをとん済ぬゝて瞽叟とハ現在舜の父なり。古人ハ質朴ふして物ことふ遠慮あることなりしことを禹の舜乃命をうけて征伐しなりて瞽叟を三苗よたとへて。矧茲有苗といへしハあるまじれてあるうと思ふやくハ瞽叟ハ三苗よりあしれし也。禹の時鯀のこととく遠慮しといふとし。註者為親者諱やうとへ。故まれ瞽叟のことをもて三苗ふたとへるハ附會のことゆゑふ。孟子ふ載る逸書をあげて。はくろひとゝをのゆえてる。此等のことハ何ともいひかたくのことふあふつのさろとしふまとも何もとも附会のこしたしふ、

志まゝる上ハ人心道心の説をはしれ例なく後世よりあれあやせゝろてなぶりて。舜禹の本語よあるまじきことあるべきなりありあるとも論しおゆかむせる先人諸友し會しく。荀子の書を読く。解蔽篇に道経曰人心之危道心之微危微之幾惟明君子而後能知之と云ことをみつけたり。今の古文尚書のことばハ此よりとれたることにて。舜のことばふにあらざるへしとて荀子の本文この前小舜のことあり。又精一の説なとも見えざる。古のことふなって。古文を偽撰せる者の允執厥中をいれて附會せるとし見えたり。荀子の註に今虞書有此語而云道経蓋有道之経やし。然れども荀子の註ハ唐の大理評事楊倞か作なれバ只

今の書と見えて後世にも出でたりと云へども本にも說授し伝ふ
べし詳なるべしいま庸敎揮の編頃よりあつまりて示す
禹謨帝とあらべくべしそこにて
人心道心とあつて今日人心の上に能くこれを治めこの
こと見るべし多く說授を伝ふ後人所欲不踰矩云
人心ふ似ら存乎人者豈無仁義之心乎人心の上に能く
つ說授を無仁義之心乎人心の上に能く
見るべし

あり次に人心ゆへ仁人心あり道心ハ二つ立
つ者なるべし先儒の說乃ち欲気の
たるべしと人心ハ性命の正よりつくるとなり
ゆへ出る正と口ハ口ハ出る說ハ
ものの性あり次に口ハ飢飽寒暖の欲ハ牝牡利害の念ハ
人心物心なるべし物心ハ此ハ口ハ
此ハ人義理と云べし人心ハ此ハ口の肉ハ邪と希ハ人
義理と云べしあつこと食ハ人ハ穀ハ
肉ハ糠覈を示食ハ糠覈ハ食ハ
あ人の味ハ穀ハ食ハ肉ハ
ものこと出るべし出る美味の臭ハ

ことをいふ。人の中にあるこゝ
ろ。ひとつにして愚又知とこゝろ。人にして
食色のこゝろ。人にして義理のこゝろ。知也食色のこゝ
ろ。禽獸虫魚凡生あるものゝ。人にして人をこゝ
の頭圓と足方に。万物の中にひとり異なるこゝろ。
こゝに才にして。知ふとくして名すくれ人にこゝろ。
禽獸虫魚にして。別なるこゝろ。
てこゝろ。義理のこゝろ。人にして肉よくして善なる
こゝろ。夫子曰。人紙弘人。程子又曰。人
無道。不無人。こゝろ。人の言こゝろ。夫子又曰。人
こゝ生直。孟子曰。人性善。猶水之就下也。

人にして欲気ふかくして。こゝろ。竟人の性とこゝ。
こゝ。天文と考へ地理を云。上古百家のこゝ。
法百年のこゝと推。億万の人上一人にして。親とはく
つまこゝ。万里の遠さこゝろ。こゝ也
人にして人にして。人性の異なるあるこゝ。
微と論こゝ。人道の名目こゝ
こゝ
人道の和と。又人欲にして。朱子の說。中庸の
序。人心道心の二。上者下愚。
こゝ。こゝ。
人欲の和と。畢竟人にして物。人欲

あるゆゑんのものなり。此二つは程子の說又其のしてあり。
遺書に云。人心私欲や。乃人正心や。又云。人心惟危。人欲や。道心惟
微。天理や。乃人心と云。天理人欲と同じ。人欲と云ふ。陽
明は程子の說とちがひ。人心を浮を正者昂乃人心
と云を正者昂人心邪有二心や。程子の語若分析而意義淆
らし。傳習錄は詳なり。王子は合てとのまをしらふらて程子
の說とをしをしるしなり。此をしりて諸語はあらをさら
しあをしは。諸語は物ふあらをしをしをしらをしらくを
見はとあるをしあのしし

天理人欲とは後世宋朝に來をしらを若惡の四名にして。
望人のしをと說くは盡天理を拔而無一毫人欲を私をなり。

此をしをし礼記樂記の篇よりおこり。人生而靜をしを性や感於
物而動性を欲やしをしを下にをしを。人化物や者滅を理而窮人
欲者やし。陰象山を邪をして拔をしを。天理人欲を言ふ
自不をを論若天を理人を欲則を天人不侔矣此甚不蓋あ
於老子。樂記曰。人生而靜をを性や感於物を動性を欲や物
至知知而後好惡形焉。不能反躬天理滅矣。天理人欲を言蓋
出於此。樂記を言。亦根於老氏。此意は礼記の意ふをは天
はをを言ふをしを。人はをを惡ふをしを。聖人の言ふあ拔。
を說はをしを。ふをしをあを。拔をしを礼記の本文と熟讀を
ふ。滅を理を窮人欲者やしはをを。ををををしをしをを。
人欲はをのをを。拔をのしをふあをををを

わかるまでなしとて至極とするゆへあしくなるなり故にこれ
を理と人欲とわけていふハ礼記より出たることなり後世のごとく
人欲といふものを悪の名としてつかふにあらずといへんや孟子にも
寡欲といひてあるを無欲といひてハ分明に後世ハ後世一毫
人欲のけがれなきをいふにハあらずといふべし
或人の云孟子に寡欲といふハ人心のあるべき欲をいふ也是を節に
してすぐれざるやうにせよとなり人欲のけがれしといふハ人心
のなきことを悪におちいると云是ハたゞしきことあるまじきことなり
故に先儒無欲主静の説あり何ぞ一概に論ずと見えたり曰人心
人欲のことハ前に詳に論ずるゆゑなり無欲寡欲のことその
ゆゑにふたゝびいはずまづしるべし先儒の本旨を為に附ハ

たとへあるまじ無欲主静といへる論語の古註にもあること
なれども宋学の旨のごとく精しくハなし次に周濂渓
の太極図説並に養心亭記と云文あり記の文ハ張宗範
と云人のきくを書んと名付たる周子為に説性理大全にものせ
とのせたり文に云孟子曰養心莫善於寡欲其為人也寡欲
雖有不存焉者寡矣予謂養心不止於寡而存耳蓋寡焉
以至於無無則誠立明通とし朱子太極図解に与之而云欲
則欲寡而理明寡之又寡以至於無則静虚動直而聖可学矣
と見えたり是によりて見れハ周子朱子のいふ所ハ無欲をもてしれハ
孟子の寡欲といへると不足にやとおもふ無欲といへるに見えたり
されバ又孟子のいふ所ハ寡欲といふものとあしかれ欲しきなれハ

ことを寡くすることあるまじ。されどもおのおのれ
てくることをかいあつめてもくろくやくしくしく。庭訓に所謂悪を刑
しくこの欲よりおこる。聖賢の言あり。孟子の意決しく
たあるべうもとおこる。欲しつるものは人のあるべきことあるべきこと
もは礼義をおもくのべて。ことをふることろをやうにして。ことばは
もくあれやうにせしめて聖賢の常制はしふ。世を推
く弊あることあるべし。物ふることもとうあるべと無世ん。如もとて
ことは何とのべしてあるべんや。後世の人人欲をもくあ
分疏あることもと。畢竟京有ることきあることもと須弁
もとく〜

人欲と悪といつよりおこるべと。人は形気のけしくしふ

て。人の命とおくしつをあることもとあるべし。欲しつるもの
変色臭味居室と衣服。男女の安楽あんことを類の
ことをすべし。法免くしつることは。人もとおのおの食と其人の命と欲
の事一ことと。故食色性やしつるべ。物もことを夫婦居室朝夕
よ食べものといふべ。人の常あるべ。物もはもとおのおの食と欲
ことのおろかと。聖人形気のけしくしふくしあるべ。
聖賢決を能授は。是端のことは人よは。事あることあるべ蔬菜一食
一〜〜。食色の命とこと。傷者ことあるべ。物
もはおもと形気のけしくしあることひくしいやしむることを。
聖人のことは人はあるべ。教と立て人とおもふあることを。故
よ率性ことを謂ことを人の性名をもくみく。聖

明剛柔式ハ色式不及聖人にまでおこさむれ礼義中なりと以
てのりしてきまふさるるゆへに示したまふ人の性をみ明
かなふるやうに習ひ道をあろ得てはてつまりてまし
てんす欲し頼さしくともそへば悪むなら故に良心と云仁
義の心といふも何かいても人の心ふるあらはるくいふなくば
てさふあらそしまきまく説さるへし
聖賢の書よ仁とんて並べのせるてあるそれ三月不違仁
しと云以仁存心と云の類是なり仁と心と一とし二としいふハ先
儒程子是を用ひもちて日心譬如穀種生之性便是仁陽
気発則乃情也是ハ仁と心の生理をみるもの也と云かくの
ごとし以て余景思問ふて與仁朱子日仁字是虚心字

是実如水ら必有冷冷字是虚水字是実心字ハ仁亦猶水
の冷火の熱ハ日仁即是心如鏡相似仁便是箇鏡之明
又ハ仁と心と是る程しれまてきなふるくゆへに以てま
は其説よりまハ人の生あり肉と仁あるひとしいてハある
ゆへ鏡の形あまハ明かなるてらし水火の質存ると
さへ是熱の性をてらすへし是と二つにして違と云存と
てハさらに畢竟聖人の云ハ仁義を取て成して人の
のうるものゆへに心の小違ハなきを不違仁とし云此乃
そく取てしこれをはさむる故仁存心と云先儒ハ仁を性と
すてもものてるふらるく穀種よたとへ鏡よたとへ帰仁とい
へるも皆あるへ聖人のてハ不看さるとあるそうつあとまん

人を人いあるくう仁又仁の修下ふ義をうつあるせうろ
ゐ〜
大抵んしつてものぱらく仁をいうくあるうぱ〜くをもへあ〜く
あるう。善とあるをもをうあるを。悪とあるをもをうあるを
てあるをへたるくうつてさふあるう仁又いやしむてふある
を。驚霹の仁震天りをそりしい既謁ん思うう出てあれへん
陰てふうつへし。禁討ふをあるとをうふも。古んなあるう仁を
あるう。悪るをとくを悪逆とあるをも拒く思急計謀を運
しくあるをてあるをへんのをうをあるあるいへうう仁のう
又をうつをのへをようをへんをうへうう仁。
たるいをうにを古ふいうくくしくを悪よりをもへうう仁をゆく

をを人へぱをとうをくくをへをあるうをあるを。を滑矣乃
をうくをとうをへ常に仁不仁とのあるへ。孟子曰。二伯く滑てを下
や仁をを矢天下や仁不仁又曰。天子不仁。不保四海。諸侯不仁。
不保社稷。卿大夫不仁。不保宗廟。士庶人不仁。不保四体。仁く
いへ昔乃あるう。後世よへを滑矣のをうくをとうをうあるをんを
いう。元後ん成を元成を微を。倉稟米参る二才。四惟ん
耳。往古来今。孰無此人。為形役乃獣乃禽しをあるうをを
ふく古今教法学問の美風とをんをへ。子故よりをとくん
いたくへ人のくを。飲食と享くくの人歯牙をうくをふこをを
ふををへうふをを。天下の人曰くくをを利益をうへむをくく後こ
ふうをあるう。世の中乃物。ををりくを。寒あるうをあるう。法

也。ものをやくなり。ものあつひやうあつ。ものを焼。居屋をやきわるはつ。人物を焼。ものを害又はひてそこなひ考くふ。火燭ふんかつて突（カシトツキ）と書薪を徙し。ものを打。ものをてみちるものをうしなひ。ものを怪むのはあつ。盆あり。ものをんを良んを。ものを先ものを平ものを大者（ナル）ものの類ものの切用紙新ものをらくものをものを物とてものの渋あつものとあつものを。れるを撰存用持ものの面ものの火の用ものをしてはものをしむものの

ものを。後世ものをものをんものを物欲ものはものをものをいものを。然ものを洗んものをの類ものを焼。ものの害ものを出ものをものをものを。中ものをものをものを。ものを皆佛氏のものをものを。人傷ものをいものをものをものを。山林ものを居ものを。ものをたくものをんの孤明寡ものをものをものを

ものを滑ものをものの見解ものを人のものをものを水火の違ものを。ものを説傷中ものを伐ものを。ものをものを人のものを仁義礼智ものをものの。即此ものを得ものを。亟ものを仁ものを即ものをものを説ものを。ものを先傷ものを別ものをものを。有無感滅の説ものをものを異竟精骨ものを皮ものを分ものを。ものを骨ものを盆ものを書ものをものを。ものを動ものを

訓幼字義巻之五終

訓幼字義巻之六

性　凡三十三則

性とは人の生れ付のことなり。董仲舒(トウチウジヨ)の云、性者生之質(ハセイノシツ)やうなり。聖賢書中いふ所の性皆人の生付をさして云。孔子のいふ所の性相近や。孟子のいふ所の性善。何れもその生付なり。宋朱子の説は性は本然氣質の二つをとりあつかひ、聖人の意はあらず。本然氣質の性とは、たとへば、撲漉法子(ヒウキヨ)なり。正蒙云、形而後有氣質之性。若反之則天地之性存焉。故氣質之性者有不性者焉。此説近思録第二巻はじめ。朱子はあらず本然氣質の名あり。本然の性とは人は具ふ

ゝる理をこゝに大なる在くゝに命ゝをこゝに人なる在くゝに性ゝをこゝに物なる在くゝに
理ゝをこゝに皆一太極の理なり性なる在くゝに多くゝをこゝに仁義禮智
しゝて目なる見耳なる聞ゝさゝめなるあゝす人のなかのてゝくゝ生
存ゝして物なるけるとゝて荒蕪の大空ゝなる匹夫匹婦のゝをゝろ
なるゝものまゝくゝに有生者ゝをこゝにしゝすゝしゝてゝくゝなゝく又水ゝ
のちゝひもなゝくゝてゝなるゝ人ゝに天上の月ゝにゝすゝしゝてゝそ新なる
海なるゝうゝなるゝ空人のなるなるゝもなるゝくゝに人のなるゝ
物ゝなるゝもあゝゝをこゝに一極の理なり。程子曰性即理也理
則荒蕪を於塗人一や朱子曰性者人生所稟之天理也
しゝてゝなるゝ氣質の性ゝにゝ人のなる生なる物くゝなるゝとゝなる智愚
なるゝものなるゝ愚なるゝものなるゝ剛強なるゝものなるゝ柔弱なるゝ

ゝものなるゝをこゝに水なるゝくゝのなるゝをこゝに木なるゝふゝなるゝ方なるゝをこゝに氣
質の性ゝにゝ京孟の理なるゝ物なるゝ在くゝに物なるゝ在くゝに
なるゝをこゝに傷性說の大畧なるゝ
物なるゝ人なるゝ人の空人なるゝ及なるゝなるゝ何なるゝそしゝてゝなる京孟の性ゝに
空虛なるゝをこゝにゝなるゝ一体なるゝ物なるゝをこゝに氣質のう
けなるゝ物くゝなるゝなるゝをこゝに又物欲の蔽耳目口鼻の欲者
京孟のてゝをこゝなるゝ物なるゝなるゝ空人なるゝのてゝくゝる
明正大なるゝをこゝに人なるゝのてゝくゝ甲汗後陋なるゝそゝなる人
人の空人なるゝんゝなるゝをこゝに氣質の偏をこゝに物欲の蔽
をこゝのそゝなるゝ京孟の性なるゝをこゝに氣質の偏をこゝに物欲の蔽
の為性なるゝくゝ性のそゝなるゝめなる復なるゝをこゝに人なる明鏡

のくるうと掛てく。本体の明を得ること。右欲よ濁り
はのあのこころはもまるもしくこと。やもろ月の新くこと。
こをは佛性と旅しころ欲あり。本然の性よりうくも又去
るつ程る日才稟於氣。氣有清濁。稟之清者為賢。稟之濁
者為愚。學る知く則氣無清濁。皆可至於善。復性之本
こを氣稟より然くいるつ。朱子曰。渾然至善。未嘗有惡。人
與堯舜。物無少異。但凡人汨於私欲而失之。克己則無私欲
之蔽。而能充其性耳。こ。物欲の蔽とること。又
大學章句明明德と解して云。但為氣稟所拘。人欲所蔽。
則有時而昏。學者當因其發而遂明之。以復其初也。
しこれ氣稟物欲と為くいつ。然もこれ皆佛老の

欲より出るく。堂人の言より出ること
宋朝諸儒の學術の為るこ。人の堂人及ること。
人欲のおこるこ。これこ人のそくはは堂人の地位立
ところよいるこ。然こは堂賢の人とこ。ゆるは本学こ
無欲を辨る。の一二句と奉く話頭して人を示こま
たいるこ。とのつるおこまる。者はこくいたのつる忠。
父は幸つくくいたのつる孝。人は交つくくいたのつる忠信。
是非者は交つくくいたのつる。弟へ初容周旋たのつる則
よ日ひ。何の礙ることもなくこと。然こは詩書六經は
指くのちこ。孝弟忠信。義後習。故こ。仁義後習。故こ。
書と讀こ。は出ひ。こ方まるくなる。後世の学問ら

いへとも拙く素よりむさ内と略しくみとしてしるし。
簡易の捷径と示さとして。無益の労擾とるとふなりとや。
大抵至人の人とをゆるいぬる事実の上より於て示し
給へたる人の裏の葛と表の裏のいとを食と食
し渇をいの水と飲うてくく父あるの乃あるつぬあれい
共の乃あるつぬ若あるいの忠あるつぬ信あるくそのるとと
ちひおさむるいの籍書好と考へくそこ方とまるれいるふと
さるふるくのてくたく若本んと清洗みくし。毫の
人欲と除さくく自至人よいるうるあるうるまるへくし。後
世学んの性とるくふるうるくく若んのおかるもとるくく
るるのるくく至人人と教るの方るあるく

いすん性の説さるあるくと書経湯誥篇より惟皇上帝降衷
于下民若有恒性し。詩経大雅烝民篇より天降烝民有物
有則民之秉彝好是懿徳しこもの等の語性の説のるるあるつ。
こ内書経の文いの古文尚書の内なるもの成湯の本誥も定
るくくこ後論語より夫子性とのるるくへたく性相とも習相
遠やの一語あるのくこ性語のるるくと考るふ後世の性の説し
いの分相遠るくくこるくくく

あるものゝ性もまた付のこりあるこゝ
ろのゆゑなり　たとへば人の生るゝ
ときは性相近しといへども教ハ畢竟益の
多くの人のうへ　あらかた生付のよろしき
をもつて善とす　しかるに人の賢愚
の切なるこゝろ　性相遠しといへども
教とまつたく性とまつたく別なり
性相近やすしといへ　遠きハ不遠（カラ）　謂今の人のこゝろ九分十分
こゝろ成ハ似たりよりたりこゝろ
のまゝ付ハ善なるあるゆゑ　大道のなるゆゑ
大なる相違ところのハなし　たゞ平生のおのゝ
なる相違ところのあるゆゑ人ハこゝろ
のまゝ付のこりあるゆゑ　世間の人ハ又生れ付のこりあ
りて　智の人ハ何れも悪人の中ハ
ときあり　下愚の人ハ何れも善人のうへ
ときあり　ゆゑに中人ハおのゝこゝろ
一人二人ハあれども　たとへ
ばかの雖愚なるもの　接しなれば
くとも　あるゆゑ　唯上智與下愚不移とハ
皆世間の人の上を指　下愚とハ
なるものゝうへ　性と
後世の學　性とする　文字の語句
後世の説のゆゑ　性ハ天下古今一定の

理あり。聖人のみるはまことに愚人のみるはまことに愚
なり。強ふれども何ぞ変ずる。性は一なり。いかんぞ相を
やしのごとくなるや。ことごとく相をやしなひ、行ふ。氣質の性は智愚
賢不肖相遠きあり。ことごとく相遠くなるのみにあらず。
とはいへども人の愚一のごとくなるは、夫子の性とのごとく氣
質の上にいはゆる系註に此語と兼て氣質而言
やしあり。此は本然の性をもって氣質をもって兼合ひのごとくなる
ゆへなり。強をもって聖人の性とのごとくなるは氣質の
性とあるゆへなり。これと異なるのごとくなるあること
程子の曰はく、即理やしなく、強をもへば天下古今の人は一箇の性か
ゆへなるのみ。愚の人ならんゆへなるのみ。

強ふるは惟上智与下愚不移とのごとくなるは何ぞや。程子の曰はく、愚
有二要。自暴や、自棄や。強て天下自棄自暴者。非必皆昏愚
や。往々強忍而才力有過人者。高幸をもって聖人位を自絶
於君。謂ふ下愚強考を帰則誠愚やをもって人の性は善なれども
ふるさざる理あるをもって自暴自棄してつまをもってこ
ふるさざるふるふ。畢竟愚人なれども意あるをもって下
愚ふるふ。故ふるを帰下愚やしなく説ふる。又陽明曰下愚不移。非不
移や、不肯移やをもって。意あるをもって移らざるゆへに理あるをもって
自ら移らざるあるゆへなり。下愚ふるふ。又孝ふるの人を徳修の
説なり。此章は上章と一章なり。陽貨ふるを説ふるをもって
のごとくなるあるをもって惑引愚ふるなり。

れるゝ刻をゝるゝゝ。左傳漢書等の註にいはゆる白虎通
にたくひ。向無智蒙昧なる。寒暄の挨拶をゝゝ。幼の文
をゝむてゝゝを得ざるものゝ。悪人にいはゝいはけち
ひゝ。孫紂陽虎ゝゝ。れるものゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ。黠智ある悪人ゝゝ。ゝ振舞人のゝ
ゝゝゝゝゝゝ世間人物の上なる。ゝゝ。世ゝ。
ゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ

善〳〵名付るハ文二義のこと〳〵易孟子を孟子の說よりも
もとゝ〳〵ものゝ說也〳〵もまぐ〳〵人の性の上ゝ〳〵の分るゝ者
ふゝ〳〵ゝ〳〵ゝ未發已發の間よ說〳〵二層よ分く法湯の象
とゝ〳〵ゝ未發ゝゝ已發ゝゝ發ゝゝゝゝゝゝゝ繼ゝ者善〳〵云未
さゝ已發よ分ん〳〵ゝゝゝ成ゝ者性〳〵云大極初繇の上
よ說〳〵ゝゝもと說ゝゝゝたゝ〳〵ゝゝ磨礪の糸穀と磨出ゝゝ〳〵
磨中よ分ゝゝ未發よ分ゝ盤中ゝ分ゝゝ已發よ分ゝ磨中ゝゝゝ
出〳〵ゝ〳〵ゝ下ゝ分ゝゝと繼善〳〵ゝ〳〵ゝゝゝゝゝ分ん〳〵ゝゝゝ
ゝゝと成性〳〵ゝ委〳〵ゝゝ〳〵ゝゝ通書の註よ分ゝゝゝ小溪陳
淳の說よゝ孟子のいゝゝゝ性善ゝゝ〳〵易の繼ゝ者善也〳〵云
ゝゝ出ゝその中易の語ゝ委〳〵ゝ造化源頭のゝよ說〳〵ゝゝゝ

とゝ〳〵ゝ孟子易の語とゝゝ〳〵ゝ人分上よ說〳〵說ゝゝゝゝ說
ゝゝゝゝ孟子の說易ゝゝ出ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ性〳〵云
ゝゝ人の生(ムマレツキ)ものゝゝゝゝゝ造化上よ說〳〵說ゝゝゝゝ至貴の
上ゝよゝゝゝゝゝゝ

易繫よ按ゝゝゝ易の仁語ゝ上の一句ゝゝゝゝと說下の殺句ゝ
出る人ゝのゝ〳〵と說〳〵ゝ造化のゝゝゝゝゝゝゝゝゝ陰陽ゝ謂ゝ
ゝゝゝのゝゝゝ繼ゝ者善ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
與陽立人ゝゝゝ仁與義〳〵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ繼
ゝゝゝ繼ゝ立ゝ者の繼のゝ〳〵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のゝと繼ゝ人ゝの善ゝ仁智の類ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
成功の成のゝ〳〵ゝ物と成ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

然るに人の性の善なる事は、天地の万物を生じ給ふ徳と、人倫を教へ給ふ徳とを、合せ給ふ故に、仁者は天地の徳を兼て、聖人の教を受て、仁義を知る者なり。故に曰く、諸を仁と謂ふ。知者は天地の徳を兼て、聖人の教を受て、仁義を知る者なり。故に曰く、諸を知と謂ふ。百姓は日用にして不知、是を上の句と兼て、云百姓は善を知て、善を為す者なり。仁者は天地の徳を仁と云、知者は天地の徳を知と云。

孟子の次第は、性は善悪の説多し。孟子は、人の性は善なりと、辯論して、性善の説を、主張し給ふ。

孟子の次第は、冬は伍考、冠して、ゆく春の、漫々たる、曉月を、送るとて、ゆく春の、漫々たる、曉月を、送るとて、古今学問の、内よりこれを、辯ずと、

孟子は、人は性善なりと、辯論して、性善の説を、主張し給ふ。

孟子の言ふ所の性善とは、天地の間に、氣質の上に、形を、善と、云て、四端の、人に、良智良能と、説き給ふ。

あるべし。大抵孔子の、ときは、周室衰微して、先王の、法度、尚存して、人倫を、行ふ、ことを、志あり、故に、四人、夫子の、平生、人を、導び、たく、仕を、倍ふ、仕を、好ぶ、ことを、示給ふ、義智勇、きり、人、拳ぐ、ことを、ためし、たまひ、人性の、説、基まれる、孟子の、ときは、ふかく、ふかく、父百姓、年も、もとく、世上、ときとく、壊れ、及て、人倫、仁義と、行ふ、ことの、なり、ぬと、自暴自棄の、域に、おちいる、ことを、自己一所と、思ふ、ことを、善を、ふせ、ぐ、ことを、孟子、これを、とゝめんと、なり、人倫の、性は、善なる、ものなり、と、ひろめ、人に、教へ、給ふ、故なり。

人く有者於己者弗思耳とそ也人奇宣王若寡人者可以保民乎かと自知ふをとるとるとるとるとるとるとる。胡齕とくをふるとるとる。以羊易牛のるを挙く。是人見以王矣とゝのくふるとる王覆とる仁を心良ふるとる知とるとるとるとるとるとる。仁義礼智の理性のもとゝめよ全し

先傷の說よ知とるとる。本然の性ハ一理なり。氣質の性ハ指くあり。古今性とる人。荀子揚子韓退之のとる何も皆氣質の上より論くせんとしるとる。或ハ悪と說くさ。或ハ善悪混とと說くを。或ハこゝ不あるとと說く。一定の說なし。孟子ハとるとる本然の上より論く善と定めるまるよう

て。天性の說法定とそ。然也とる孟子のとと又たく理とるとる說くと。氣質の上指くあるとと說くまるとるふるとて。荀揚韓子の說おとるとる。後世の人まるくも論くとして多くとと。朱子曰。孟子說性善。但說得本原如下面亦不曾說得氣質性。所以亦費多疏。小溪陳氏曰。孟子乃性善之說。然本上說來。不曾殺出氣稟一段。所以發後世紛々之論。と。然也とるとと孟子のいふる性善とるものもとまる氣質の上より論くを見んとるとるのみ。理より論くるよあるとる。

先傷の說よ知とるとる。若子云。都子の後。氣と偶く性しく理とるとと。然とる若子云。故子云。の說と挙

て。孟子の性善の說と終つる。孟子の正義より沙汰いつる
性は皆氣質の性なり。性の字あらはす。善いつる善は本
然の理とすべしつ。繼的之一句と說破せば善なり。
說の理を平伏しく。第世間の者を去りしとろあ
るべし。然るに孟子のいはるゝ性とは水無分東西
かとゝへば無分上下と云とこゝ先ゝ謂性とゝいたく
なり。性は生なり性は生なり性は人なり性は嗜なり。
氣質のことゝ及ぶを。孟子のいつる性善と云ふ
のいつる性皆氣質の上なれば善不善と弁しらはと
ゝるものなり。理氣の差別はあるべしつ又性ゝ
孟子曰人性之善也。水之就下也。此結也。孟子

性善と說氣質の說とまぎれて去明白なり。何とか
きへば水とゝものは流出るに上へ流出るの差別
をあるべし。いまゝ流るゝ中さ出るさゝふは上へ流るゝを
流るゝとゝいひるべし。然るに人の性の善なるは
らるゝ上は孟子の性善とゝて氣質の上已後の法なり
つゝくるべきなり。
水と流るゝ性はたゝるべし。孟子のあるべる。宋朝の
先儒はたゝるべしと多し。内たるべの五常
同しゝと。孟子いはるゝ上下の上は然るべしたゝ。後世いはる清
濁は然るべしたゝ。性の及ぶ所ひとしき人よたゝの五常
を有る相遠とゝ。孟子は人と活物と人善なるもの

てんとて次第不成也とて凡てまつろふ所のありて下
より然と仰ぐ人の性の善なるたとへ四海を知ると仰ぐ仁の極功
なりと七箇のうち一句を清濁より然るたとへとあり後
世の諸儒性の善と程子凡人欲の蔽と水の濁のごとく不
相似る句なり。とのつゝ清濁より然るたとへとある。性程子全
不性とあるはたゝる說二十三條あり。ぐ清濁の上より
然るとあるゝ。上下のたとへ相半ばするとあり。
はゝ如のごとく相きとあるとあり。明の羅整庵困知記より
善分人性とあるとあり。孟子の性の說孟子の
意よりあるとして看破せるふるふ。二說と合く性の說
ちゝめく使ゝ人ゝ。それ性の說傳あり。可の說ふく。あるとあり

ひとつの句。雜分あるとあり
孟子又告子とあるく。孟子性即友く性ハ牛之性牛之性ハ犬
人之性を人ゝ。孟子のいふ所性善ハ氣質より然るくして
決然ちう第一の明說句あり。告子ハ人の生付と性とを
白羽白玉白雪の白皆是なるとあるといふ。元生
ろ物ハ生ふ性あるとそ。ふ善分あるく。一擘よりて
きるとあるとあり。孟子ふ人ゝ犬牛
の性のごとく。牛ゝ性ハ人の性のごとく。何をちゝとあるさう
ゝ人ゝ。それ程のあるとあるゝ。告子
何ゝ執物あるとを犬牛を人を性一同たるひあるとハ
いとまを。それふるゝ。孟子人の性と善と凡てまつふ。角

強まちまちなり。人の性いろいろなれども人の性はみな善なり。孟子の性善と云ふは人の性はみな善なるなり。荀子の性惡と云ふは人の性の惡なるなり。若し人の性の惡なるなれば聖人なる者は人為の貴しとなるべし。孟子の意明白なり。的なりとなるべし。強ふ先傷性善と中庸の理とせるなり。ようやく此章の問答。子竟不完の語なり。人は浅世の惑とひしくなるなり。

先傷の說は物の生理一分殊なり。人物各獸の生。その生は皆一大極の分殊なり。氣の偏塞の異はあるなり。人は仁義禮智の性と全して物は

は無智蒙昧なり。義理の是非なし。強ふ物の性人と異なるところなり。氣なり。氣は物の性人中庸或問に人物生理同而氣異と。是家學の定說なり。強ふ孟子此章の集註に氣質則知覺動。人與物若不異。但理言則仁義禮智。豈物之所得而全乎。此意なり。人物の異はいとまなきなり。氣は同じ。さて氣質の異は中庸註の意なり。胡雲峯の疏あり。その說は分明なり。子竟賢の書は理氣の異は別なり。淺世の學。理をもつて生ずるなり。

孟子此章の系註に孟子又言若果必此則犬牛与人皆有知覚皆能運動之性皆無仁義礼智者自知之說
之非也不能對々くあるべし註の為にみくいへ孟子の本文で
ふいまひとつとものみくに若子とくふそうとそうけハ
先傷の意のごとく知覚運動の生人と物とかそうるこ
さこるかいなそこ性猶牛之性牛之性猶人之性と云
在覚能のみなく動さこくこくこくいへりこうる人も物もの
ちうこるこ能則犬之性猶牛之性牛之性猶人之性
こくこくへてあこちひとあるとや若みるとの成れこその
みうるるこいこ孟子のこ樂へ言ものここのるこ
竟人の性と犬牛の性とハ各別なこうるものるこ

てこそこと一樂ふ〜こいこ〜孟子こまこと仏て若
子とさこさんうるよここ方のこくこく概ま生れ性と性こ
時へ犬の性と牛の性を人の性をぱ〜こひくこ有るこんこ
うこあくこるこうるこたくへ人の情とこるこ方こ
るもへ日へるこうるこいこんこ誰こても日へるこるこいへ仏こ
ここみくこ先の說のあやまこうるこ赤せこて自ら的のるこ下の
章みと能則嗜炙亦有外焉こ云能則飲食亦有外焉
こ云何をぱ〜ここみくこ程のるこるとあくこるこうるく
るここくこ孟子の性と云このこまくへ犬牛の生れこ者
ひこうるこまくこ見れ〜こまこへ章能の性とこるあくこうるこ決
能こうこ家傷性と程こ見こ生と云こ運動こ解せこうくま

うつくしのてくき意あり。生付の上ふてく善と云うく
ん淳うしてさい。系説とまてこと〜てどのつ〜明白あり。又太
牛の性とどまの性のちがひ〜又人〜さい。宋学の性説より付
合ところあり。もとこれ一章こと物ふうち生まく謂性〜陰く氣
の上より物〜くとさたる物あり。ひこ〜ふいてうく性の実理〜
〜〜。そもそも人朱子孟子要旨〜〜書と撰也。孟子中性
と説諸章と挙らくよ。一章と〜〜也。戯謔の語不完
のてこ〜ふく。此上より直指人心の説あり。也〜ようと〜ひと開
〜〜〜。諸類よあ〜ちろ
告子仏教。荀揚韓子の諸子。孟子の説より服せ〜也さろ〜也。
子、竟孟子の説と扞うく〜ん淳性善〜〜と一聲よう

〜く第〜ろ四人ありて今日庭の人を。大〜さい孟子の説と合
ち也〜〜て人の性い善〜いそ也〜〜〜〜〜何也〜〜
〜〜ありて。孟子の性善〜〜のてきく水の性いひ人人の性あ
ひて〜〜〜〜〜〜。大聖よ科筒〜〜ろ〜ありて物の不斉
物〜情あり也〜〜下のあふたまあくい温泉をあり聖ありもあ
也〜〜〜。そふろ〜〜水の性よふ〜ありて〜〜〜人の性と
善〜〜〜〜〜〜ふく。たまく人性あ〜〜の悪人をあり又あ
〜〜ありて〜〜〜物あり也〜〜〜。そ也〜人よ不成人のあ〜〜。
又い物の腐敗〜〜〜〜〜〜

人の一生涯に一念も悪念なき物にして、ひたすらそなはるものの
なり。然るに人はあしく成ぬと云て、荀子の性悪説。
一人の生涯の中にも善もあり悪もあると云て、
揚雄は性は善悪混じたり。天下の人の性もあしくあ
らず。韓退之は性有三品にして何を
一品とも云へべきなれども皆本とたくさんにして来と逐
人心の作用さまざまあると云て、哀情の本まことに善なる
ことをもとめうる人あり
荀子の性悪説とたがひ教とたがひ人とたがひ
さへらくなりと云て、性悪篇に詳なり。人
のもとあるところ良剣も磨淬と加へさるを利なし。

名なるを頑なると加へさるを愚なりとあるこれ
し。これまことに教の功なり。然るに虎豹犀象の暴
悍なる畜も教をくはへさるに何れも善をもてを人の役な
さしめ。馬牛のごとく人の役なるを性柔順なる
なり。人の性と善悪とをもてをなるに学問修行の工なき
時は善もなくなるなり。孟子四端をいふなるところの
本。人の性は善なるなり。教をもてくはへさるに性の善
なるをもて人とし。揚雄善悪混の説は孟荀の説とあるを
くたそうるものなり。二性あるこれは詳なる論
をもふ及ばざること。韓子の説をもつて人を人の旨とせし。今日
人の上なれば人たるまたしふ此をもつのふくあるなり。然れ

〻を手竟と推し仕あらく見るこゝにはぶくあるべし
こゝを孟子の説に孟子の説に孟子の説に隱くれ人皆有之
〻〻皆の字を能く見るべし天下の人と一はを見て
をのゝ〻〻をのゝ〻〻の説の意をもつて人の善をもむ示の
事なり〻〻孟子の諸子を比して〻〻
荀揚韓のこゝろ性の見をもつてあり〻〻性の名義を賢
の〻〻をもつてをるなり〻〻を侯人の生付の上をもつてあり
〻〻宋朔仏果の説に性善〻〻〻〻孟子と相〻〻〻〻
を性の名義を書の肯を相違して理と性善〻〻を抵
を賢のとゝへに世間の人をひろく示〻〻なきをもつて性
を〻〻〻〻の何を世の人の生付を〻〻〻〻

あゝとのこゝろなり佛家に世間の相とあゝ〻〻〻〻
をるゝ〻〻〻〻性の説を世間の義〻善悪の人の書何
そ〻〻〻〻をるゝ〻〻程を曰人生の静を上不容説才説
性特不見性〻〻又李延平曰初静真偽善悪皆對而言〻〻
世〻所謂初静真偽善悪邪性〻所謂初静真偽善悪惟
未発於有悪〻〻先の性〻善可見矣〻世間の人の〻
ゆる性〻〻〻〻の〻〻の性〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻
〻〻故曰漢唐諸儒不知性〻善而性〻義不違古宋朔
傷先説性〻善而性〻義乖古
畢竟荀揚韓の諸子の人の上を能く性を〻〻〻〻〻〻
人の上を善悪邪正さまゝあるべし〻〻聖人を善〻〻〻〻

そもゆへは或は悪しと說或は善悪混じと說或こゝかゝるこゝと說て
一定の說なし。孟子は情の上より見てこれを性と云て世間の人生を付
さるまゝふかゝるまゝだらく善とのみとくゝして惡とのみとく
ゝと。故曰乃若其情則可以爲善矣乃所謂善也。情よ
つゝく善と云ふるとのみ詳なるは情の條下よ善し。又古
聖指要みをそなと希と
程子曰。論性不論氣不徹論氣不論性不明二ツ共に則不足と。
仏意は本体の性なりと說く。氣質の不同あることいとき
也は本やうゝ分れと性の全体徹とと又氣質の性なりと
つとゝつゝく本体の善よりゝつゝさを性のあるゝ正とゝ
あつゝく性の義はなるゝと。性と氣とのこゝは相合なるものなれは。

引るゝくそと二つよりなるゝと。又なるゝ物をゝくゝと
あのゝくゝくゝゝかれは孟子の性とのゝくまるゝを。
明不徹の善と見るとして。宋朱の說よ及ゝとゝつゝ
し。何そなるは先儒の說よは孟子は本体の善とさゝ出く。
性善と說ゝまるゝとゝ。氣質の不同あゝゝとさゝ示するゝ
ゝるゝく。荀揚韓等諸子の說おゝゝもゝしゝゝ。孟子
は性と論して氣と論せと。不徹とゝゝのみあゝゝやまさ
孔子性相近也のゝまるは先儒これと氣質の性と說るゝ
ゝゝ。孟は孔子は氣と論ずと。不明とゝゝのゝ
ふあゝゝや。程朱の說なるは明徹あゝゝく。孔子孟子の說。
とふ不明不徹の善とまるゝもとゝゝしゝあるまゝゝ

あらそ皆後世の性の説なり。賢の上のようなるもあらて。
ひくのこゝとこの身有なるこゝあり。朱子諸類に論氣不論
性。孟子言性惡。楊子言善惡混。王充。論性不論氣。孟子
言性善。王充。又曰。孟子終篇未嘗所以性。但不能杜絶揚子
こゝつ。王充意はこゝ。又支子性相近。習相遠。言氣質
質の性と説こゝ。こゝつ。朱子の系註。氣質を言
こゝつ。王充。不得已の説なり。さはけ前よりこゝ
行こゝ詳なりと
歐陽永叔云。人教人性邪。許元。李翺。善惡を書
あこゝる。揚雄山と邪こゝて行こゝ。孟子遇人便云
性善。歐陽永叔都言。人教人性邪。許元可謂誤矣。人

性上不可添一物。堯舜所以為聖世。孔子率性而已。所謂
率性循天理。王充。孟子序説。
王充こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。

地と。伝〳〵てたゆ〳〵紆らぬとも〳〵むるがごとし。耕作と
う人。精出し〳〵はたらもるとも〳〵れぬ。たゞ人を田の良とまつ〳〵も
〳〵人〳〵。とのつ〳〵秋穀の得りのあり。そ面人は聖人
のと〳〵人〳〵。さ〳〵を法徳業のもと伝く。人は若あれて。
性の伝を志ものあり。志〳〵人の聖性と先と世ぬと〳〵人も
とまりあり。孟子の性善と〳〵と。たゞ性の形とあるを
むる〳〵なあり。性の善ふ〳〵〳〵乃よりてさるとまるさ
を〳〵形ひとにて〳〵めさるふ〳〵〳〵のるあり。故は要そん者知
そ性や〳〵〳〵。法世の性と見るして志るして第乃乃
形性の中にあり〳〵〳〵そ皆佛家用人見性の説〳〵か
て。聖人の性とのさまく〳〵の意〳〵甚差別あり。惡の説のこ

〳〵さこを。
法世の説。復性〳〵あり。又復初〳〵もいそ〳〵人の性の
形。本来純粋（ジュンスイ）の善あり〳〵ものあり。物欲に形かれ〳〵
ふ〳〵〳〵。そ本体のもとをあ〳〵復るふ〳〵〳〵人欲〳〵
乃乃〳〵〳〵。本性のもとめふ志ひ〳〵乃〳〵そ先佛の説は
れ〳〵〳〵。聖人のもと人〳〵と去渕面小の意あり。性の示〳〵
く論本もとあれいそ〳〵詳〳〵もふ及〳〵と。大抵聖
賢のもと人〳〵。善性の善と本として。性〳〵成出もと抵は示
〳〵〳〵。故は性は然〳〵いは善〳〵。五吏の上は接先〳〵云推〳〵云
達〳〵〳〵。本に人〳〵乃〳〵〳〵〳〵。たゞ〳〵〳〵乃を流あ
萌蘖は〳〵て。明鏡止水はたゞ〳〵乃〳〵と。今日人性の上

小然く見るは幼少の時は無智蒙昧にして邪の希へもなく義理の差別を弁へず唯長ずるに父母と呼んで物まねひつもりさへ親恋のこころ生ずるなり次第に活発しく聖賢者の域にもとゝむべし然るに人の生るゝやうは聖人にもあれ愚人にもあれ性の本体は人倫の教あるのみなり唯聖人と一般なり物欲に汩れて昏ふ昏く成人に及んで私と成て滅しくはなはだしく復性とは幼少の人と皆聖人と一致の初心なり尋の本源に帰して即ち尋の本源に帰

うとは人人生まれつきの理を尽くしひろめて聖賢のごとく幸実に然く示さるゝ所なり聖人の学ぶ人は学ぶと教ふる人は教ふるに因りて教へ進むと教へ功と法世の学は性を教ふる因あるゝと教へ復初と教へるなり

と希せるとんいあるべしと

今時幼少のための書とは伊呂波とかひそをもろ遊新清息笛のものと続るひ志あるものは四書五経を素読しく後は諸子百家の書を通し古今の要と希へるなり人倫の事物の事を記憶するか性情を通ずる為なり隆く法もむるこゝさは次第に事と廣く見聞するなり人く有生のごとく諸子百家の書をくく

胸中に伏する物、欲のおもてをかくれうるものあるを物
欲と称するなり。物あるを物と。そもそも人間の子の学問に進むに
長ずるにおよびて、ものをよく文武の道をまなびて、又仁
義をもとむ。上をもとめてをのれをすてるなり。「外」とは、ものを
さるのみをもとめて、百姓を及し、親族兄のことを推して、天
下を生をもとめるなり。何をもとめるか。性のもの
ものをもとめるなり。先仏の説きて、端なるものを。
畢竟本来の地を立てることを。仏氏の説とさしてが
法流猶を滅してあるべき。物よりの人、皆仏なり。先と
本法を忽然として明の途をもとめて、三世十界を猶
白しくれ変じてあるを流猶ともいふ。寂滅

の志、称ずるを滅してしてを。仏氏の人、欲をいふ。
もとの性とするものあるを。先と生人のもとを引
合せてをひとりをもつ。ひとりけ四端擴充の説きまり人
又人〳〵
傷家は優性にして、宋初の説をもとに説くこと
おもくこそもとの諸傷を説く。廣の中、兼は本翻字なり。
こと人あり。官協律郎なる人、恨律子〳〵と。韓文の門人
なり。代人優性書三篇と著せり。文光英、義を垂る性理會を
の書。全くこそとのもとをおもしろく。大抵性をほろぼす
性をもとめるにしてあり。文を。情者妄や邪や邪与妄則
無所用矣。妄情滅息、本性清明、周流六虚、而以謂之旅優

之性やうく。傷者の復性にして。そもそもそもそ

のいひなあらんと。又他書に龍とゝる小中庸に反諸物不誠不順乎親
矣とあり。易坎卦の大象に君子以反身修德とあり。礼記樂記の
篇に不能反躬而天理滅矣とあり。孟子に反求諸己とあり。
引く。自反而縮雖千萬人吾往矣とあり。彼己也とあり。
ろ小人は或は反とゝ云。或は反物とあり。或は反物とあり。
物〳〵皆〳〵反求〳〵己身とゝ云。反求とあり。復性
の說授とゝ云〳〵

荀子性惡篇に謂性者。系註に云。與近世佛氏所謂作用見性
者略相似。小溪字義云。佛氏把作用見性。便喚蠢動含靈
皆有佛性。運水搬柴無非妙用。不過只認得箇氣而不知着
那理耳。とあり。後の學者。皆〳〵此言に從て。傷者の

性とゝ云〳〵佛者。のたゝひは傷者は性に本て氣質のけがれ
あり。本然と云とゝ云。氣質と氣とゝ云。佛氏は氣と性
とゝ云。性とゝ云〳〵。極至とゝ云。佛氏
の說とゝ云。傳灯錄に云。達磨の波斯匿王に言とゝ云
とゝ云。其言に云。如何見作用見性。曰在胎爲胎。如世
名人在眼曰見。在耳曰聞。在鼻曰香。在口談論。在手執捉。
在足運奔。徧現俱該沙界。收攝在一微塵。識者知見佛性。不
識者喚作精魂。とあり。又曰。佛氏は氣と氣とゝ云
て性とゝ云。あり。視聽言動の作用あり。皆佛
性のたゝきとゝ云〳〵。徧現とゝ云は俱該沙界と
いひとみゝ云〳〵。作用とゝ云は性と名

付るゝくん淆ゝまぜるゆゝるゝ曲くあまぜゝまぜ。たゞふあゝまぜ。
ゝつゝく後世の所謂本然の性ゝつゝまのまちゝ。仏家
ゝ本性ゝ性ゝ性ゝ曾のゝ繁ゝるゝくあゝ術を作用ゝゝて性ゝ
ゝゝゝゝゝ見ゝゝまぜゝ正生ゝく謂性ゝゝゝ。紀覺運動ゝ註セ
らまゝゝゝゝ生ゝゝ。生の字よへ生死の生あゝ生夢乃
生あゝ岩子ハ人の生まぜ付ゝゝゝ死ゝ性ゝゝゝゝゝ淆ゝ善
悪の差別ゝゝゝゝゝゝゝゝ。孟子ゝまぜゝゝゝゝゝゝゝ。白羽
白雪皆のたゝ人ゝゝゝ。六牛の性ゝ人ゝゝゝゝゝゝゝ。後動
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

拘要ふ詳なあらざるをあらざるべし

或云子貢曰夫子の言性与天道不可得而聞也と性天の

妙は初学のふかくよるべきところにあらざるを子貢況乎ふいはん

て天を奥ふかくと云ふ儒〻くわしくいへども性とは

知行のところはかりをもつて人の生を付と性

とつかれのごとし雖ともくを去り清濁を論ず偏

の性天のるを去向上よん清濁をもつてふかくのこと

こと就あるをもつて尤よはあるを惣別人のこと然い相互用

てもつぱら人のことをもつぱらをもつぱらとす夫子の性とのこと

ことをもつぱらむとせは論語よのもとにて知る能く況

へし。論語は性の就多くはんつをたく性相近や習相遠やの

一語あるのみ有教無類とつくしそれを性といふことは

ともに性相近の語と一般に二語ともふ人の性はかりをれは

ふるものとのこと多くはつて第は悪く論をもつ

つるの。独をは夫子の性とのこと多くの語。子言第語あるとも

を以ものをさまり。独るふ世上の人をあること見るはは。

何ともいてを人は性分をもつ中をもつぱらのみをもつぱらあるいたく

生を付よりもくどくはんんをものあり独をと夫子

常ふ中のこと多くつるをもつるく。不可得而聞やといふるあり。性

とをもつとのこと多くはんはをもつぱらをもつるふあるを。

性の必言をもつむへくをもつぱらのるあるを言は論をもつるを

のこと多くあり。ことをもつぱらをもつぱらをもつぱらをもつぱらといふ

たゝるふあくとゆゝしの他の毒ものゝ毒なるものゝ
と善人は福をうることゝ淫人はうるものゝ毒なる
傾業せてゝ毒さるふるゝ不可淫ル間やとゝ云
仕事結盃字義小論　しゝく　おとゝゝく　非脇明正直仁
熟智至者不能識ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　智恵料簡と仏ゝく
志ゝゝゝのゝふあゝゝとゝ乃法紙幾の上ゝあゝゝゝ誠ゝ
志ゝゝゝふあゝゝとゝゝ乃の條下ふとゝゝくゝゝと論れ
ゝゝ性ゝゝゝゝ不準ゝゝ　何ゝゝゝゝ人淫ゝ乃ゝ性
て仁熟ゝ智ゝゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　

人よりてはぢとふ義ひとまわりまさりあるもの也天下
治せんとすれば人をしれいたらざるべからず。施用正直。
仁熟智玄のたぐひ也

情　孔丸則

情とは人の上より然く思色安擬よりて生じ付ろ
まことのいつわりなきをいふ世間の人物とう
ぶしいつわりなし。後記礼運の篇に何謂人情喜怒哀樂愛惡
欲七者不学而能とそれみなこれ義をつとめうるべき傷
の義なり。人の未發を性と云。已發を情と定めるべきも活
人流性情の義なり出でうるものなり。宋朝以来を説一定し。ひと
くせ説と守也。古人のとるあらず。古抵宋傷以来多

とふ体用理氣未發已發の分と立てうるもとを堂人の
言よりて云ふ人物の上より氣といひ理といひ用といひ
体とあるもとを已發の説あり未發の説あり
先傷の説なりとてくいい初辞とをくく初を辞ると皆人ふ
つ性は体情は用なりくいの辞あり正と性と云。初く正と情と云。
先ふる云ふ礫水や性則水く辞。情則みく初理学類論
こもとを云又曰性者人之理情者人之用と性は学義なり
とを云たとへは性はみの器中にあるがごとく情はみの流也ごとく
あるがごとし。皆人の働と情とは強也とを古書と考へる
ふ性情の分別は初辞の調ふあるもとを上四段ふくいふ者
もとをとく多し

同說ス未發と性と已發と情と云ふ孟子の情と云ふ
性の善と云ふことはたゝ梅の芽と云ふこと根の梅ことゝ
と云ふことゝ已發の情本ヨリ善と云ふと云ふこと
へうゝふこゝろつくこと未發の性の理善あることゝ云ふこと
孟子と已發の上ハこゝろと云ふことを云ふと云ふこと
ふとこゝろつくこと也同の人孟子性善の說とうけうこと云ふ
善子以來荀揚韓等の諸傷ふまゝの說ひあることをいうけか
つこ若し都ふとゝこゝろつくこと已發の情ハ善あり惡あり性を性の
本体ハ善惡の二ツ兼備るやと同こゝろハ孟子の說畢竟揚
子善惡混の說ふ落ち性善の說ことゝ後世の說ハ已發の上
ふあり惡ハ隔溺とつくこゝろのふくこと性の本体ハ善ことゝ

云ふ又已發已後のふあることハ情ハ善あることゝ云ふこと性を
孟子の情と以ふく性の善と云ふこと未發已發の云ふ別
ふあることゝ云ふ
或云孟子情ハこゝろつくこと性善と云ふこと未發已發の云ふ別
あることハ何と以ふく性の善と云ふやロ情と云ふこゝろのハ人心の思
慮安排ふ付てこゝろとして生ずるこゝろあり何て
を物の本性ハ生ずこゝろ上ふくこゝろ人心ハ
ハつてふ及ふこゝろ本性ハ善あることなくこゝろ
ふくこゝろ人心ハ善ふくこゝろ本性善ふくこゝろ
のハかゝこゝろ人心ハ善ふくこゝろ人心ハ善ふくこゝろ
の本性と云ふ

善惡とだんくに本とをうくる善惡とをうらはらにあるものなり
ゆへにこゝろのうまれもつとき本性にあるとまた〳〵うまれつき
くるとき本性にあるとを枝のきゝの枝付の本と木の本
性とをあはせ書經に本曲直とをあり情をその色うまれ
ときとをとをくらべ人に本をひあはせてをとをし
てゆへにこゝろむこれ人にあひ思色安擇とをふあはせ人に生
生ずるものあり天下の人倫をけ色りあり故に人の情とをいて人
の本性の善惡とをあはせ考へ〳〵ゆへに殺と惡とをあはせ考へ
先儒孟子の四端のんと仁義禮智とをあはせ情〳〵又中庸の喜怒哀樂と
仁義禮智とをゆへに二說あり相反者をとあり四端乃んと
情とをゆへに情へ善惡のあり喜怒哀樂のあり情と

情とをゆへに情に善惡の二つあり善とをとをあり
又先儒に減情の情の語あり減情とをゆへに情とをのこゝろ
〳〵こゝろのとをこゝろ朱子語錄類要に判斷あり四端を理
に殺七情を氣に殺とゆへに理字義に孟子四端を當然善
虛言に中庸喜怒哀樂及七情等を含善惡說に又胡鮮
の鄭士雲天命篇說に辨別詳にあり世に法とをを何を
糢糊混淆に善別にこゝろあり世に法ひ先儒仁義禮智と
性とをて四端のんと情とを定め又中庸喜怒哀樂未發の中と
性とを已發の和と情とをてこゝろふるくゆへに有なるべし
畢竟四端を喜怒哀樂を皆んのもとをさあり肉に思色
安擇にこゝろををて自然あり和情とをゆへにこゝろをて

おこるんへをそなへ思慮安排をおこすをいへんといへく
して情といへんへうをも後記礼運篇に喜怒哀樂をを悪欲七
者不学而能なる七情といへり。自ら志人〳〵已数来数の
差別あるを
情は人の志向のんあり。善と悪と色むへ人の志向のんか
るゆうく。色と情とは又色とは食と嗜のさくひも人のま
こゝろをいへり。情とは人情欲情をを
云。多く男女の間のあひけをいへり。ゆへ染さりめ
ある色へを。約情節情のこと。あり。然をとを減情とは佛老の
とを人を落く。望人の志向あり。又漢傷及説文の註は陰陽
情陰と陽とをつこれをを多つこれをく情を情欲の情を

つをめく差別しく。善とこの悪とをくひを人のまをくれ
へ。又情とはつさるをとをもを
或問。論語に云。苟得を情則哀矜而勿喜とあり。これをう
るの上とあるもくの情あり。然を情とをとを善しいをを
をいをを人の好悪の志向あるをとは。良人をんとはを人の上
ふ然を云情善とは氣質の上に然をんるをは。
何をあをを。文字の中に情志情欲とを。又云父子のまこと
とふ親をとを情親と云。こををのをあををををををよか
をををとめく人のこゝろの中に於ををまをあるふををくめく
いをを。然を苟得を情とはあをこをあををををを。於をて

むさぼることをいふ。貪は財をいつくしむ。正体のところを情といふ。孟子の情とは若しのごとくなるべきなり。正体のまことをいふ。ことのしるしのごとくなるべきなり。情と若とは通用す。

つくろふ　つくろふ　ことを飾るなり。

去聲　情と惰と異なり。惰は怠なり。

情　ひとしくなる。風しきたりなり。

らんてん　ひとしくなる。情しいたるところあり。畢竟は極

不孝　父母の長命をまつたくするとなり。孫

の孫　子の子。人の仕合をいふ。人の雜俗を

て笑ふなり。情あり。又人をつくるなり。或は又

みちびくなり。人のあることを收ひ。人

のことをいふ。孫は子の子。人のあることを收ひ。人

らとしへいたるなり。孫は子の子。情とは情をいふ。皆換

弊　うるのみなり。生付のまことのこころあり。孟子の性善人

く情　弊と云。後世のことなり。人情不近人情とは

皆そなはりこれなく情の善なることなり

淫昏錯　上書に云。人情莫不欲財色生而不傷。人情

莫不欲富貴而不困。人情莫不欲逸樂而不畫。又程子遺書に云。賢者不欲都

人情　こころのこと。情の字の日本にかなはなくなり。

と情　つよくこころ。又音の謝安の苻堅肥水の

戰に姪謝玄と進しくこころをつむぶ。折ふ客しく對しく

碁をうつ。そ時は敵とやうの左右を分て。児小ま破敵ヲ
いひくさつぐ。そもくも。□とあるふ。殺ヲ歯と折とうつ。ひう〻音
史は矯情鎮物ヲ云。こそいんの中にいはのかけ。そしくとをくと
を。おくくくろうこべ亜とんはんをくいあれとおとひて。ひとく
ちつめく。人のそちらうやうはもとうもの。囲の宰居しくく。
んとちつめうこしいあ〻こそこうけふいあ〻こそもとて
ろのまこふいあ〻こそと矯情ヲ結物ヲとつ。史傳の内。ゆくのこ
とさるのあまくあそもくこそ。そ仕るのてと。ゆくそのはけ別〻
てゆうるあうゆくこそと拳くこそ。ゆを比倒ゆくこそとくく

訓幼字義巻之六終